

## 人間のありか

澤井 万七美

東亜大学 総合人間・文化学部 比較文化学研究室  
E-mail: sawai@po.cc.toua-u.ac.jp

金田 晋

東亜大学 総合人間・文化学部 比較文化学研究室  
E-mail: kanatasu@po.cc.toua-u.ac.jp

山崎 正和

東亜大学 総合人間・文化学部 比較文化学研究室

小川 國治

東亜大学 総合人間・文化学部 比較文化学研究室 (2002年度着任)  
E-mail: ogawa@po.cc.toua-u.ac.jp

山本 達夫

東亜大学 総合人間・文化学部 比較文化学研究室 (2001年度着任)  
E-mail: yamamoto@po.cc.toua-u.ac.jp

勝田 耕起

東亜大学 総合人間・文化学部 比較文化学研究室 (2001年度着任)  
E-mail: kkatsuta@po.cc.toua-u.ac.jp

### 1. はじめに

自分はいま、どこにいるのか。

この問いには二つの意味がある。

ひとつは、21世紀の幕開けという時代に居合わせ、日本という場に居合わせている、ということを考えるため。そしてもうひとつは、「自分」そのものにあらためて向き合うため、である。

この問いをあげたのは、いまほど、そしてここほど、人間のありかが揺らいでいる場はないのではないか——そう思えてならないからである。現代日本に生きる我々の感覚は、飛躍的な変化の時期を迎えているといわれている。パソコンや携帯電話などの凄まじいばかりの普及によって、質量ともに想像を絶するほどの情報がたやすく手に入り、人間関係の広がりや頭脳の

拡充が可能になったのだと。だが一方で、自分が、そうして得たさまざまなものを本当にわかっているのか、そこから何を考えてゆくのか、そして何を発することができるのか、はっきりとした意志とことばをもって言うことのできる人間が、育たなくなっているのではないか。

「しょうがないんだ、今時の若い人はね」

そう言って、苦笑まじりに嘆くのは簡単である。

だが、彼等はまだ知らないだけかもしれない。いまという時代を展望すること、自分たちがいることという場に、光をあててみることを。

### 2. 「わたしたち」——日本人

何か発言を求められても、すぐさま応答はしない。ちら、ちらとまわりをうかがって、誰かと目が合えば曖昧な微笑を浮かべ、また視線を

浮遊させつづける。あるいはうつむいたまま、身じろぎともいえぬほどのかすかな身のねじりをもって、ことばを受けとめることも、発することも拒否している——ということ、察してもらいたがる。ことばで答えるといっても、せいぜい、

「別に…」

「よくわかりません」

との眩きがいいところ。よく外国人から非難を浴びる、「日本人らしい」反応のひとつである。周囲の状況をうかがいながら、なるべく目立たず、浮き上がらず、やりすごしておこうという意識のあらわれと言われるものだ。

数ある「日本人論」の公式のひとつに、こうした「個の突出を戒め、集団(共同体)を重視する」というものがある。これは、たとえばハリウッド映画に頻出する日本人像にも顕著にあらわれている。軍人、サラリーマン、観光客…みんなが同じ服装をし、同じ顔をした集団として、たいていはネガティブに描かれている<sup>(1)</sup>。

こうした世界的に流布する映画というメディアのみならず、子供たちへの教育に用いられる教科書にも、同じような日本人が登場する。『海外の教科書にみる異国ニッポン・グラフィティ』(財団法人国際教育情報センター 1983)を一読すると、欧米からアジアまで、さらに多くの国々のまなざしを知ることができる。さて、「不思議な国・ニッポン」の特徴として、どの地域の教科書においても大きく取り上げられているものは、いったい何だろうか。

実は、風呂なのである。珍しいと思われるのは、どうやら「大勢の人間が一堂に打ち集い、入浴をコミュニケーションの場として楽しむ」ということらしい。銭湯や温泉の、まさに芋の子を洗うがごとき集団入浴が大々的に取り上げられているのみならず、いわゆる一般家庭の入浴場面も必ず複数の人間が同時に浴槽に入るものとして紹介されている。凄まじいのは、1975年とやや古い資料ながら、イギリスの教科書に掲載されたイラストである。どう見ても「家庭用」の小ぶりの浴槽に、4人も大人の男性が同時に体を押し込んだ状態で談笑してい

るのだ。その4人の男性のうち、3人までが律儀に黒ぶち眼鏡をかけているのは、「日本のサラリーマン」の象徴づけのためであろうか<sup>(2)</sup>。この他、ほとんどSFに近いようなイラストや描写が次々に展開されるのに、最初は大笑いし

ていられるのだが、

「これが、子供たちに日本のことを教える材料なのか」  
 ということ改めて考えると、次第に物哀しくさえなってくるのだ。もちろん、デフォルメされたイラストだけでなく、きちんと日本で撮影された写真も掲載されているのだが、いずれの視線にも共通しているのは、やはり「日本人=集団主義・没個性的」というフィルターを通してということである。

このフィルターの強力さは、日本人自身にも影響を及ぼしているようだ。日本人ほど日本人論の好きな国民はいない、とも言われるが、その中身の多くは、こうした「日本人=没個性的」というイメージを自虐気味に強調するものである。この「日本人=集団主義」という概念はしかし、ある文脈では俄然輝きを帯びてくる。戦後の驚異的な経済復興を語る時である。多くの日本人論の主な「消費者」が、経済の最前線にいる企業人たちであるように、「日本人の気質・行動はこうである」という定義は、企業運営に必要な知識として吸収され、確認される。その端的なあらわれが、「社員一丸となって」のスローガンであったり、お揃いの法被であったり、その厳しさでもって外国人を驚倒させる新人研修といったものであろう。

だが、いま、こうした「日本人像」は、改めて問い直されねばなるまい。良かれ悪しかれ自明のこととされていた、日本人の「集団」「共同体」への意識が、根底から揺らぎはじめてい

### 3. 「いま、ここにいるわたし」——生の実感

場をわきまえぬ携帯電話、通路での座り込み、電車の中でのフルメイク…。ここ数年浮上

してきた青少年像は、従来の「日本人」の枠ではどうも語れない。こうした根本的な TPO 感覚の欠如は、彼等にとって「世間」というものがもはや脅威ではありえないことを示していよう。

だが、それは「自分」に絶対の自信があるから、というわけではどうやらなさそうだ。面と向かって何かを問われたとき、彼等の多くもまた無表情のまま、あるいは意味不明の微笑を浮かべ、小首をかしげてみせるばかりなのである。

「わたしはこう思う」

「わたしはこうしたい」

そうした「主語のあることば」を語ることに自体に抵抗があるのではない。それは星の数ほど生み出される個人のホームページひとつを例にとっても明らかであろう。携帯電話や電子メールでの「会話」のこまめさは、むしろ驚異的ですらある。何もしないでいることを恐れてでもいるかのように、一心に掌の小さな画面に見入り、あるいは耳をすまし、とめどもなくことばを繰り出しつづける。いまどこ？ 何してる？ わたしね、わたしね、わたしね… 傍若無人さと共存する、孤独へのおびえ。

こうした姿からは、「わたし」が「いま、ここに<sup>●</sup>いる」こと——否、「いま、ここに<sup>●</sup>いるわたし」そのものへの不安がたえずたちのぼっているように感じられる。

「わたし」の実感の不確かさに関して、精神科医の香山リカと作詞家の秋元康の対談を引こう。

秋元 今の時代が… 社会がね、人間関係が非常に希薄になっているんだと思うんですよ。植物的っていうか、たとえば友達同士でも、あんまりべたべたするのがやだとか、あんまり束縛しあうのがいやだっているじゃないですか。だからすごい人間関係が希薄な時に、たぶん現れた男性が、「君でしかだめなんだ」と、「君以外はだめなんだ」と、つまり「スペアのな<sup>●</sup>い恋」をしたくないんじゃないかと思うんで

すよ。そのことによって自分が、その相手がどんな、たとえばちょっと悪いタイプであろうが、すごいいい人であろうが、つまり「自分を求めている」ってところに感激するんじゃないかと思うんですね。

香山 私は精神科医として、もちろんその「とりかえのきかない自分」を誰もが持つっていうのが生きていく基本なんですけどね、それはふつう恋愛じゃなくても、生きていく基本として、そういう気持ちを必ずもたなきゃいけないと思うんですけど、どうも今の人たちって、職場とか家庭とか別の場所では、「これがとりかえのきかない、かけがえのない私なんだ」っていう気持ちを持ってなくなってきてて…。

秋元 うん、それはあきらめてますよね。

(2000年5月2日放映 NHK『ETV2000 冠婚葬祭』シリーズより「婚」)

ここで指摘されているのは、「共同体 (= 職場や家)」における「自分」のありかの揺らぎである。

「お家のために」「我が社のために」、こうした日本人の“滅私奉公”の精神は、かつてしばしば揶揄と恐怖の対象となってきた。なぜそこまでして、集団のために個人を犠牲にできるのか？ それで幸せなのか？ ——おそらく、そうした心意気を持っておのれの職分に臨む人間は、こう思っていたのではないだろうか。

「自分がいなくちゃ始まらない」

と。集団の一翼をになうことはすなわち、「自分」の存在に誇りを持つことではなかったか<sup>(3)</sup>。

しかしいま、そうした場では、自分を「とりかえのきかない」「かけがえのない」存在であると思えない人間が増えてきているというのである。その実感を得られるほとんど唯一の場として、「恋愛」が考えられているのだと。

あらかじめ用意された台本にしたがって、恋人との出会いから別れ、再会を「経験」と

いうテレビの某企画の大ヒットも、ある意味ではその裏づけとなるかもしれない。指示された設定通りに行動するうちに、次第に「本物の感情が芽生えてくる」と出演者は口をそろえるという。たとえ他人に操られるのであれ——もしかしたらそれゆえにこそ——「身をもって経験」することへの渴望が、そこに透けて見えてくる。

#### 4. 「身をもって」——心身論

身をもって、何をなすのか。

教育改革の論議喧しい中、スポットを浴びているのがまさに、この「身をもって経験」するということである。みずから身体を使って何かをやるのが、人間の「生きる力」には欠かせないのだということを、正面きって言あげし始めたのである。思えば、人間が育つ環境——家庭・学校・地域——をふりかえてみたとき、ことに戦後の日本の教育システムには、自分の身体でもって自分の精神を表現するという発想が存在しなかった（この点、欧米の高等教育においては、心身一体の表現術の重要性が認識されているのではないか）。この背景には、何があったのか。一方には「集団の訓練」の場であるべしという無意識の了解、他方には「個人の尊重」の履き違いによる放埒。この両極のはざままで、それぞれの分に応じた「身」のありかたが、忘れられてきたのではないだろうか。人間が人間の前にいてこそ成り立つ教育という場で、まともに顔をあげてものを言うことの意味自体、ながらく等閑視されてきたのだ。生徒に対する教育内容のみならず、教師という職分においてですら。

そのつけが、まわってきたのかもしれない。生きる実感とは何かを、人間と人間とのつながりからは掴み取ることができず、流血をもってしか「自分」のありかを確認められない子どもたちが誕生するほどに。

——「派手なことをして、社会に自分をアピールしたかった」

これは、世間を震撼させたある事件を引き起

こした少年が口にした「動機」である<sup>(4)</sup>。こうした発想は彼ひとりに限ったことではない。殺人犯が連日テレビや新聞で大きな話題となっているのを見て、「自分も話を聞いてもらいたいから」という理由で、何の所縁も無い人に刃をあげた若者もいるのだ。

「自分をアピール」する？ 学業で、スポーツで、芸術で？ どうせそんなことはできない、誰も自分を認めようとはしない——だから、この方法を。みんな自分に注目してくれ、事細かに心の動きをあれこれ探り出そうとしてくれる。こうすれば社会の中で、自分が主人公となれる。

では彼等にとっての「社会」は、どのようなものなのか。お決まりの文言通り、テレビ、パソコン、そういったメディアにうつしだされる範囲が彼等の「社会」すべてなのだろうか。もしもそうであるなら、自分が王である画面で充足するほうが確実だったはずである。だが彼等は、他者の息づく身体がひしめきあう現実の社会の方で凶刃をふるう方を選んだ。この世界のなかで、この身——「自分」を確かなものにするために<sup>(5)</sup>。

#### 5. 「分」の喪失——人間のありか

そもそも、「自分」とはいったい何か。

心理学者の木村敏が、『人と人との間——精神病理学的日本論』において示した、「自分」についての東西比較論を紹介しておこう。それによれば、西洋世界における「自己」は、あらゆるものに先立って存在し、いついかなる場合でも確固としてある不変のものだとされる。一方、日本の「自分」は、そうした確たる存在ではない。本来自己を越えたなにものか——他者との関係、世間——から、その度ごとに得られる「分け前」であるという（木村 1972）。

注目すべきは、「己」ではなく、「分」ということばである。この一文字には、人間のありかを示唆するさまざまな意味がこめられているように思われるからだ。『大辞林』の頁をひらいてみよう。「分」の第一義には、こう記されて

いる。

- (1) 分け与えられたもの。わけまえ。わりあて。
- (2) 人が置かれた立場や身分。また、人が備えている能力の程度。分際。
- (3) 本分。つとめ。
- (4) 物事の様子・状態。また、程度。くらい。
- (5) 当然そうであること。
- (6) 名詞の下について用いる。㊦一定の関係にあることを表す。㊧それに相当するもの、またはそれにあてられるものの意を表す。

まず第一義は、総体的に“周囲との関係”が示唆されている。が、同書に記載された第二義は、こうなのである。

一般とことなっていること。一般とちがってすぐれていること。また、そのさま。

この一行に見て取れるように、おのれの「分」を知るということは、単に周囲を見回して小さく縮こまることでは決してない。むしろ、際立つことなのである。但しそのためには、自らの身一つで、世界の中に昂然と立つ覚悟が必要だろう。『新版 漢語林』<sup>(6)</sup>をひらいてみると、「分」の項目の一番初めには、こう記されているのである。

わける。わかつ。わかれる<sup>(7)</sup>。

そして、きっぱりと他者からわかれ、ひとり立つことは、人間にとって

さだめ。きまり<sup>(8)</sup>。

でもあるのだ。

この「自分」の「分」。世の中に占める「わたし」というもの。

いま、ここにいる我々には、「分」の感覚が確実に失われつつあるように思われてならな

い。

## 6. むすび

かけがえのない「自分」のありかを感じることもさえできない、人間たち。いま、ここで、日本の戦後教育が無視してきた「こころとからだ」の問題が、社会に恐ろしく深い傷跡をつけずにはおかない形で露呈してきた。こうした現状をただ眉をひそめてやり過ごすことは、われわれにはできまい。少なくとも、人間に向き合う職分を選んだからには。

もう一度問い直そう。

自分はいま、どこにいるのか。

どんな時代、どんな場所に生きようとも、この問いがやむことはあるまい。絶対的に正しい答など、そう簡単に得られはしないからだ。ありかの知れない不安を抱えつつ、「自分」について言えるのは、今のところこれぐらいである。

その場その時ごとに、他者と時空をわかちあいつつ、なおこの身ひとつで立つこと——人は共感と孤独を知りそめて、はじめて「自分」になりうるのだ。

人それぞれに、「自分」のありかを探る旅が始まろうとしている。ならば、この身に火をともし、遥か彼方をも照らし出そう。さまざまな時代、さまざまな場所ではぐくまれた人々の佇まい、まなざし、祈り——それらはある時「文化」という名で呼ばれてきた——に、その灯火をかかげよう。その灯りはたとえ小さくとも、いつかひとつの道標になるだろう。そしてまた、世界の中に占めるその位置、「自らの分」は、唯一無二のものになるはずなのだから。

### 付記

本稿は、澤井が作成した文章をもとに、比較文化学研究室の構成員全員の意見を集約したものである。

## 注記

- (1) ハリウッド映画における日本人像については、村上 (1993) に詳しい。
- (2) このイラストに付された説明文は、次のとおりである (日本語訳は本文中の『海外の教科書にみる異国ニッポン・グラフィティ』による)。  
「日本人にとって、入浴はレジャーであり、親睦をはかる活力である。仕事をしている人たちは、都市の生活の緊張を解きほぐし、リラックスする方法として、1日の終わりに、入浴するのを楽しみにしている。」
- (3) 2000年5月8日付『読売新聞』の記事「バス乗っ取り『注目されたかった』少年、犯行動機に触れる」より。
- (4) こうした集団に対する意識については、次のような指摘がされている (中根 1967)。「(「個人/資格」よりも「集団/場」を重視する) この集団認識のあり方は、日本人が自分の属する職場、会社とか官庁、学校などを「ウチの」、相手のそれを「オタクの」などという表現を使うことにもあらわれている。この表現によく象徴されているように、「会社」は、個人が一定の契約関係を結んでいる企業体であるという、自己にとって客体としての認識ではなく、私の、またわれわれの会社であって、主体化されて認識されている。そして多くの場合、それは自己の社会的存在のすべてであり、全生命のよりどころというようなエモーショナルな要素が濃厚にはいつてくる。」(引用文中の括弧は澤井による)
- (5) 日本語の「身」は、単にボディを意味するのではない。『大辞林』(1988、三省堂)をひらいてみると、その第一義には、  
「生きている人のからだ、またその主体としての自分」  
と記されている。第二義は、  
「社会的存在としての自分のありようをいう語」  
なのである。
- (6) 鎌田正・米山寅太郎著、1994、大修館書店。
- (7) 字義のうち、第一義の (1)。
- (8) 字義のうち、第二義の (1)。

## 参考文献

- 青木保 (1990) 『「日本文化論」の変容：戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論社
- 府川源一郎 (1995) 『「国語」教育の可能性：ことばを通してことばを発見するために』教育出版社
- 木村敏 (1972) 『人と人との間：精神病理学的日本論』弘文堂
- 財団法人 国際教育情報センター編集協力 (1983) 『海外の教科書にみる異国ニッポングラフィティ』耕文社
- 小谷敏編 (1993) 『若者論を読む』世界思想社
- 村山上由見子 (1993) 『イエロー・フェイス：ハリウッド映画に見るアジア人の肖像』朝日新聞社
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』講談社現代新書
- 大森和夫編 (1989) 『私たちが見た裸のニッポン』朝日ソノラマ
- ルース・ベネディクト (長谷川松治訳) (1967) 『菊と刀：日本文化の型』社会思想社
- 山崎正和 (1990) 『日本文化と個人主義』中央公論社
- 吉野耕作 (1997) 『文化ナショナリズムの社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会